

神学部の学生たちとの タイ・スタディ・ツアー

原 誠
大学神学部助教授



わたしは今年も九月一日から十六日まで学生たちとともにタイを訪れた。同志社大学神学部からは三回目となる。わたしは前任校の新島学園女子短期大学在任中の一九八五年以来、毎年、学生とともにタイ・スタディ・ツアーを行ってきた。このようなプログラムを始めるようになったきっかけは、同志社大学神学部の先輩の一人であり、日本キリスト教団の宣教師としてタイの唯一のキリスト教総合大学であるバヤップ大学の神学部に十年間働かれ、その後恵泉女学園短期大学の教授になられた望月賢一郎先生のアドバイスによるものである。わたしは学生とともにタイに行くようになってから、彼の地で実に豊かな多くの出会いを与えられた。それはわたし自身の学問的研究の態度、視点、方法にも、また信仰にも、深い影響を与えた出来事であったからである。同志社に移ってから、わたしはタイでの経験とそこで蓄積された財産を若い学生諸君とともに分かち合いたいと願い、神学部の学生がこれに応えて自主的なプログラムとして続けられてきた。それは学生たちにとって、タイで体験した事柄、出来事は、かれらの生き方、学び、信仰、神学の研

鑽に意義深いものと確信しているからであり、わたし自身も彼らの前に立つ一人の教師として、若い学生諸君とともにこの経験を味わうことができるからである。

十数年前から日本で始まったアジアに対するエスニックブーム以来、東南アジアへの距離感はかなり近いものになってきているが、しかしわたしにとってはこのツアーで体験した事柄や人々との出会いは、ブームという言葉で言い表されるような、表面的なことや一般的なものではない。わたしたちのタイでの体験は、わたしなりにいえばタイにおける、タイ人、山岳民族の人々、タイで働いている日本人、そして参加したわたしたち同士に生じる「出会い」である。ここでいう体験とは、つまり「通過」してしまう旅行者としてのそれではなく、「出会った」ことよって、わたし自身が、そして参加した学生自身が「変えられる」という、主体的な人格的な出来事としての意味である。そしてもっと踏み込んでいけば、それは人間観、世界観、そして信仰の出来事や神学的問いにつながる事柄だといえる。

今までと同様、今年もわたしたちはタイの首都バンコクを経て北部タイのチェンマイにあるパヤップ大学マックギルバリー神学部を訪れた。学生たちはこの神学部の学生寮に宿泊し、交流の時を持ち、また昼間は授業に参加した。神学部の先生たちは同志社の学生のために授業をしてくださった。いうまでもなくタイは仏教国である。タイ国憲法によれば、信教の自由は保証されているが王室は仏教の守護者であることが規定されている。そのような仏教国であるタイ社会で少数派として存在しているクリスチャン。そして同じく少数派である日本のキリスト教。それぞれがともに神学を学ぶことの意味について、またそれぞれの社会で生きることに語り合い、学びあうという体験をした。

また過去十数年にアジアの奇跡といわれるほどの急成長をとげたタイの経済社会の中で、しかしその繁栄からは取り残され、逆にその生活の急激な構造的転換を強要されているビルマとの国境に近い北タイの山岳地帯に住んでいる人々の村を訪れ、数日の間、暮らしの中に加えてもらった。この山岳地帯一帯を含め、タイ国内には七十九万人にのぼるカレン、アカ、ラフ、リソーなどの諸部族が独自の文化、言語を持って生活している(チェンマイ大学教育学部の調査報告)。歴史的には中国やネパールからビルマを超えて焼き畑を繰り返してタイ国内に住み始めた彼らは、タイ側からみれば不法侵入者であり、当然国籍もなく、また多くはタイ語も解せず、電気や水道もない、その意味では非文明的な暮らしを続けてきた。しかも雨期になると山岳地帯では道がぬかって数カ月は文明社会との交通は遮断される。そ

してタイ政府による森林伐採の禁止や、彼らにとつては換金作物として栽培されてきたケシの栽培も禁止され、従来は貨幣に依存しない暮らしであったのが、現在、急激なしかも困難な転換を迫られている。その山岳民族の村を訪れ、ともに食卓を囲み、礼拝を守った。彼らの部族のなかには村全体がクリスチャンであることが多い。これは彼らが中国の雲南省にいた時にキリスト教の宣教師に出会って、村ごとで集団改宗した結果である。いくつかの部族は文字をもたなかった。そこで宣教師たちは彼らにアルファベットを教え、彼らの言語を学んで聖書を翻訳した。このような村の教会で、今年もわたしは説教する機会を与えられた。英語からタイ語、そして部族語という三段階の通訳が必要だったこともある。今年山岳少数民族であるラフの牧師の司式によって聖餐式に与った。これは長いわたしのタイでの経験でも初めて経験したことである(写真[1]参照)。パン屋があるわけではない山の中でビスケットのかけらと赤く甘いジュースによる聖餐式、これは得難い経験であった。

タイ国籍を持たずタイ語を解せないかれらにとつて、重要な問題のひとつはこどもたちへの教育の問題だ。教育の機会が保証されていないかれらにとつて、ただでさえ貧しいなかで何とか子供たちに教育を与えたいと小学校からチェンライ郊外にあるアメリカのバプテスト教会によって四十年前に設立された学校に子供を送る。わたしたちはこの学校を訪ね、学生たちはこどもたちに授業をし、またともにスポーツをし、ともに食事をするなどの交流の機会が与えられた。こどもたちは山の村ではそれぞれ部族語による生活をしてきた。しかしこの学校はタイ

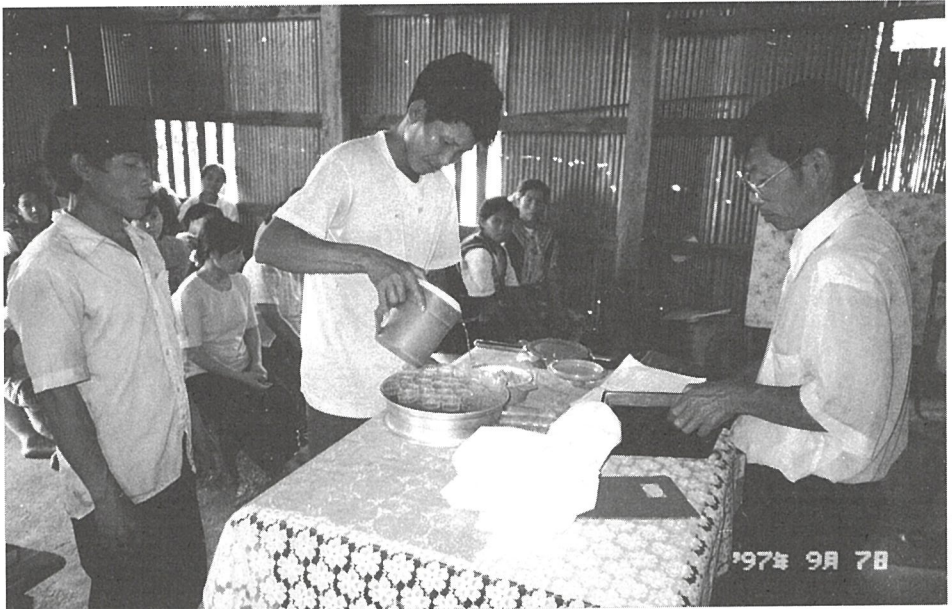


写真 [1]

政府から公認されている私立学校である。だから当然のことながら共通語はタイ語でありタイ語で生活しタイ語で授業がなされる。山にいる親たちの収入は、近年、換金作物として栽培するようになったトウモロコシ、シヨウガなどによって、平均年収約三万五千円から四万円である。中学生一人の年間にかかる授業料、寮費などは約二万五千円ほどだ。これは親からみれば大きな経済的負担であることはいうまでもない。そしてこの学校では自分たちの民族伝統をしっかりと保持することが重要な教育方針となっている。彼らは好むと好まざるとによらず、タイ社会でタイ人とともに生きていかねばならない。つまり「タイ化」せざるをえないのだ。その時、自分が何者か、ということをしつかりと意識化させようというのだ。わたしはこの学校の存在とその教育方針に深い感動を覚え続けた(写真[2]参照)。

そして、そのようないわばタイの辺境の地にも日本人がいる。二つのタイプの日本人だ。ひとつは文化人類学などのフィールド調査のためにタイの大学に籍をおいて山に入る若い学生たち。もうひとつはこれら山岳民族を支えるべく活動を続けている日本人NGOの人々。後者の多くはビザの問題などにも本当に苦勞しながら青年の自立や子どもの教育に奮闘している。わたしたちはこれらの施設を訪ね、交流を重ねた。そしてオールタナティブな生き方をしている日本人から受ける刺激は大きい。

また五十年前に共産化した中国から逃れてきた中国国民党の残党で、かつては難民であって現在タイとビルマの国境の山の



写真 [2]

中に住み続けている中国人の村、いや村というのは当たらない、人口は一人を越えているのだから、もはや町、を訪ねる。ここを訪れる日本人はほとんどいない。中国からきた彼らとは漢字による筆談が可能である（メーサロンというこの町については最近のテレビでチェンマイで死んだテレサ・テンが、この町に非常な関心を持っていたことを知らされた）。

北部タイの旅を終え、今度は歴史の生きた教材に出会う。アジア太平洋戦争時に日本はタイと軍事同盟を結んだ。しかしこのタイでは、戦時下にビルマとタイの間のジャングルを切り開いて鉄道を通じた、あの「泰緬鉄道」建設のために多くの連合軍捕虜、またその他「労務者（インドネシアではロームシヤという言葉が辞書に残っている）」がアジア各地から強制連行によってここにきて、劣悪な衛生・栄養状況、伝染病によって多くの人々がここで死んでいる。かれらの命とひきかえに建設された鉄道は現在も利用されており、わたしたちはこれに乗り、そして連合軍兵士の一人一人の名前が掘られている墓地、そして捕虜収容所を復元した博物館を訪ねる。この博物館の名前は「JEATH博物館」という。JはJapan、EはEngland、AはAmerica、TはThailand、HはHollandの頭文字を表し、全体としてはDEATH、つまり「死」に引っ掛けてある。

以上、述べたことわかるようにわたしたちのタイでの体験は、一言では説明し表現できないほど、多様で、深く、そして重い。たとえタイの人々の表情が微笑みに満ちたものであっても、その背後にある、彼らの個人としての努力などはいかに

ともしがたい現実の課題の中で生きていかねばならない重さを知らされる。その時、わたしは彼らにとつて「何者なのか」という問いを避けるわけにはいかない。旅行者ならば「通り過ぎていく」ことができるし、そして自分の都合を考えて、あるいは計算して「道の向こう側を通つて行」(ルカによる福音書10・31)つてしまえばよい。この言葉は新約聖書のなかの有名な「善いサマリヤ人」の譬え話である。一言でいえば行為の伴う信仰が求められているのである。いい経験だった、これもまた一つ、あれもまた一つ、の経験なのだから。そしてわたしたちは日本のわたしたちの日常に戻ってくればよいといつてすまずこともできる。かつてチェンマイのYMCAの総主事と話していたときに、彼は「現在のタイの社会で最も必要なことは、『善いサマリヤ人の神学だ』と端的にいったことをわたしは忘れない。そしてわたしたちは、タイで多くの人々、出来事に会った。出会った以上、わたしたちの内に変化が起こる。そしてどうすれば文化や言語、政治、経済、その他多くの点で違いがあり落差がありながら、なおともに生きていくことができるかを問い始める。わたしはこれは本当に生きた神学の課題、神学的問いだと考えている。そしてわたしたちはこれにそれぞれが答えを出すことが求められている。わたしはこれを「応答」(response)と表現したい。そしてそれは「責任」(responsibility)につながる。

毎年、帰国直後にわたしは空港で学生に言う。「さあ、これから始めよう」と。

「本当はわたしたちはタイの辺境の地まで出かけなければこの

ような課題と出会えないのではない。この日本の暮らしの中でわたしたちの生き方を問うことのなかからでも出会うことのできる事柄であり出来事であることを発見し、日本でいかに生きていこうとするかというオールドタイプな出来事を認識することである。例えばタイの山岳民族の問題は、歴史的事情はまったく異なっているが日本社会のなかではアイヌの問題、つまりこれはアイヌの問題ではなくわれわれ日本社会の問題であることへと視点が開かれていくことだ。歴史的に文化的に限りなく同質性を求める私たち日本の社会では、「国際化」を叫びながらも多様性を認めることについて、また他者とともに生きていくことについて実に多くの障害があり困難がある。わたしは一方でこれを日本の「国際化」の問題でありつつ、しかし他方、信仰的、神学的課題が含まれていると考えている。これを学生とともに体験しながら学ぶ。これがタイ・スタディ・ツアーである。

渇くアジアと 世界に水を

山本真司

国際中学・高等学校教諭

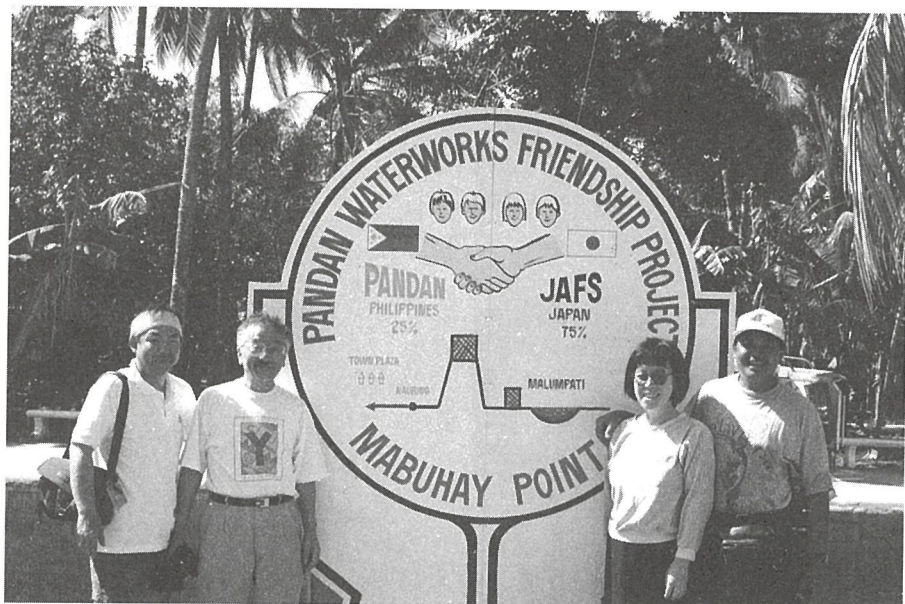


はじめに

ネクタイにジャケットは三月のマニラには少し暑すぎました。パンダンの町長や現地のスタッフ、学校訪問などを組んでいましたので、日本式の正装を考えてしまったのが誤りでした。フィリピンの正装は風土に適しているのです。ついでに革靴も「しまった」と思ったときには後の祭りでした。結局、ビーチサンダルをカティックランの「ビーチサンダル屋」さんで買うことになりました。

ところで、私がなぜフィリピンに行くことになったかと言いますと、高校三年生を対象にした選択科目に協力していただいているNGO団体、社団法人アジア協会アジア友の会が実施しているフィリン、パナイ島パンダン町での飲料水パイプライン建設現場を見せていただくと考えたからなのです。このプロジェクトに本校はクリスマス献金の多くの部分を捧げていて、それが実際にどのように運用されているのかを生徒、教職員に報告するためでした。どうして、水道なのでしょうか。

「アンテイク県はフィリピンで最も貧しいとされる十一の県のひとつです。そのなかでパンダン町はアンテイク県の中においてだけでなく全国的にみても最も貧しく、また、最もかえりみられることのない町です。ここでは、頻繁に起こる旱魃のため、不適切で不衛生な水を使用しています。このためアンテイク県パンダン町の人々はたいがいの人々が胃腸の病気で命を落としています。また、現在使用されている井戸の水に含まれる過度の塩分のため、高血圧や心臓病が多発しており、これもこの地域の人々の深刻な死因のひとつとなっています。日本の皆さんにアンテイク県パンダン町の人々の健康と生存のために、衛生的な飲料水の供給をご支援いただきたいと思います。」このように、パンダン町の医師、ポプ・アロヒパンさんは「日比友好飲料水パイプライン建設のための計画概要に訴えておられました。パンダン・プロジェクトは一九九四年四月から三年を日処にパンダン町役場とパグダタップ（パンダン郷士会）がアジア協会アジア友の会（JAFS）との共同事業として始められたものです。」



記念プレート マブハイポイント

一 パナイ島へ

マニラから頼りなげなセスナに乗り込みカティ克蘭に飛びました。若い操縦士は隣に乗せた眉目秀麗なお嬢さんと親しげに語り合いながら操縦桿をさばっています。時折、小型ジェット機や足の速いレシプロ機が私たちをかすめて行きます。眼下を眺めると深い青に彩られた南の海が広がり、平和な楽園を想わせるのです。ただ、いくつかの航行用計器が全く動かなくなったり、ビニールテープで補強された風防ガラス、針金で仮止めたような部品にさえ気を止めなければ至極快適な空の旅なのです。身動きの取れないこと九〇分、どうやらカティ克蘭に着陸いたしました。多くの観光客はここからシャトル・バスとフェリーを乗り継いで、ボラカイ島というヨーロッパ人に人気のリゾートへ出掛けて行きます。私たちはパンダン町からの出迎えを空港ターミナルで待つことにいたしました。どうも、連絡がうまく行かなかったようです。パンダンには電話がないらしいのです。仕方なく、トラックを改造したバスのような乗りものをチャーターして、目的地へと向かいました。どうも、聞いた話では、日本人なのでフィリピン航空のジェット機でカリボという全く反対側の比較的大規模な空港を使うと考えたらしいのです。

AFS/Kaipipi Foundation

List of Artesian Wells Donated by

Doshisha International High School



国際中高が贈呈した井戸

01. Filipino-Japanese Friendship Well No. 88
 Tabing Ilog, Sumnocab, Cabanatuan, Nueva Ecija 1991
 Funded by Doshisha International High School
 Direct beneficiaries : 50 households Code : 911223

02. Filipino-Japanese Friendship Well No. 108
 Brgy. Lambakin, Jaen, Nueva Ecija 1993
 Funded by Doshisha International High School
 Direct beneficiaries : 37 households Code : 930408

03. Filipino-Japanese Friendship Well No. 131
 Sta. Monica, Dampulan, Jaen, Nueva Ecija 1994
 Funded by Doshisha International High School
 Direct beneficiaries : 35 households Code : 940611

パナイ島の集落ではこのように刻まれたプレートが基礎部分に埋め込まれた井戸を見ることが出来ます。毎年のクリスマスマス礼拝に集められた生徒、教職員の献金が「安全な飲料水」に姿を変えてきたことに感慨を覚えました。この三基の井戸はここに住む人々にとって掛け替えのないものとなっています。それどころか、井戸の建設によって新たに集落が生まれていた場所さえあったのです。少年や婦人が井戸に水を汲みに来て、一杯になった器を大切そうに持ち帰る姿は私の心を揺さぶりました。この一見何げなく繰り返される日常の風景が私をパンダン・プロジェクトへと導いて行きました。豊かな水の国に住んでいて、稀に水不足が深刻に報道される他は、「水」に対して無関心な私自身を顧みただけです。

これらの井戸を維持し運営しているアジア協会カリピ基金のジミー・クナナンさんは家族で私たちを歓迎してくれました。豊かな海の幸を御馳走になりながら、アジアというパラダイムで発想することの大切さを語り合ったのです。

二 国際理解

「何故、私たちがフィリピンの水道工事を援助しなければなら
ないのですか」

もったもたない疑問だと思います。高校三年生の宗教選択授業で
のひとこまでです。フィリピン政府がすべきインフラストラクチ
ャーを日本の一NGOが担っている、そのほんの一部分を私た
ちが受け持っている訳ですから。ただ、このクラスでは「国際
理解」というテーマを掲げて、主にアジアの隣人との出会いを
学んでいますので、意外に明確な答えが見えて来ます。それは
ODAでは相手にされない小さなプロジェクトだということ
です。ここパンダンでは「おいしい」大型プロジェクトを展開で
きないので。産業と言えば小船を操る漁業とバナナやココナ
ッツを収穫する農業くらいのもので、人口も二万六千程度、
対日感情は芳しくありません。と言うのも、第二次世界大戦で
ここはレイテ島と同じような激戦地だったのです。肉親が日本
軍に虐殺されるのを目の当たりにしたり、記憶に留めている人
たちがいます。

「わたしは一人、小屋の中で深い回想にふけっていました。あ
のつらい歴史を、わたしは忘れたいと思いますが、我々が友人
である彼ら(JAFS)のボランティアを含む日本人」がここに
現れたことによって、それを思い出してしまいました。わたしの
母と現在九十五歳の祖母の記憶の中では、その出来事は、彼
らの人生の一場面において、寒気する墓場にいるような経験
でした。日本軍の占領期に、中国系の私の祖父は、日本軍に拉

致されました。彼は無実でしたが、拷問を受け、もう少して殺
されるところでした」

シャルロットG.チャンさんはこのように回想しつつも、新し
い日本とフィリピンの友情をかみしめておられるようでした。
恐らく、この辺りから「国際理解」という出来事は始まるので
はないでしょうか。

三 友情の架け橋として

「フィリピンには“Bayanhan System”という伝統があるん
だ。天災で困っている仲間をだれに言われる訳でもなく助ける
ことなんだけど」パンダン飲料水パイプラインの技術主任で、
私たちのガイドでもあるダニーはパンダン湾に沈むとてつもな
く鮮やかな夕陽を眺めながら呟きました。

もちろん国家レヴェルでの援助プロジェクトは必要でしよ
う。全く同じ地平で「私」レヴェルの出会いもまた大切なこと
です。マニラ空港で出迎えてくれた方は私財を少しずつ学校建
設のために捧げていました。バグンバで出会った少年は私が忘
れたカメラのフィルタを大事に持っていてくれました。レク
トラ町長は嫌というほどアイスクリームを振る舞ってくれまし
た。このような小さいけれども忘れ難い出会いが、アジアの広
がりを持った「バヤニハン・システム」を作り上げて行くので
はないでしょうか。